

第 25 話 吉野時代の文化

ひじょうじ
 公家対武家の争いで、たしかに国内の非常時であった吉野時代は、
 はんえい
 文化の上にも明らかにその反映を見せている。

ふしぎ へんたいせいじ 不思議な変態政治

吉野時代は僅かに 57 年という、国史の上から観れば極めて短い時間でしたが、朝廷が 2 つに分かれて、全国を飛白模様のように飛び飛びに二つの政府が支配するという、わが国としては、変態も変態、まことに驚くべき不思議な変態政治を行ったのですから、これが一般国民の生活や思想の上にもまた特殊な影響を与えずにはいなかった。

もちろん せいとう ちょうてい
 勿論、一方は正統な朝廷であり、一方は足利氏が自家の便宜上から押し立てた朝廷ではあったけれども、しかし、こちらには、ともかくも実権を握っていた足利氏の室町幕府があって、広く天下の武士を統率していたのですから、国民もまた自然と両朝に分属することになったのです。

くげがた ぶけがた 公家方対武家方

しこう くげがた すなわ なんちょう ぞく くぎょう ごだいご せいけんかいふく
 而して公家方、即ち南朝に属していた公卿や武士らが、どこまでも後醍醐天皇の政権回復のお企てを貫徹成就しようとしたことは、すでにしばしば述べて来た通りであって、例えば楠木氏にせよ、新田氏にせよ、北畠氏、菊池氏にせよ、一家一族、親子累代、幾世代をも経て、操守を堅く、勤王につとめて、正統の天皇の居られる吉野の朝廷を擁護したのです。

ぶけがた すなわ ほうちよう と はん
 しかし一方で、武家方、即ち北朝を奉じて政治を執った室町幕府の人々は、全くこれと反していた。かれら みな じぶんじぶん りえき ほか めやす お すなわ けつごう ぶん
 彼等は皆、自分々々の利益を図ることに目安を置いて、利益があれば即ち結合し、利益がなければ即ち分離するという有様でした。第 20 話「足利氏の内訌」、及び第 21 話「官軍の京都回復運動」で既に皆さんも見たように、彼等はただ利益一つ、権勢一つの目的のために、兄弟で争い、父子で争い、主従で争い、朋友で争ったのです。

しこう みにく り こしゆぎてき にんげん すがた ふ ゆかい つぎ
 而してこの醜い、利己主義的な人間のあさましい姿は、まことに不愉快なことには、そのまま次の室町時代まで続いている。 蓋し (訳注：まさしく)、武家方の室町幕府が正当なものと認められて、我利我利主義の武士らが、従来の慣習をそのままに矯正されずに持ち越したからです。

しんようわ かしゅう 新葉和歌集

さてこの時代の反映を明らかに示した南朝の文学として、先づ第一に挙げなければならないものは、ごだいご おうじ むねなが せん しんようわ かしゅう
 後醍醐天皇の皇子 宗良親王の撰せられた『新葉和歌集』です。親王は、既に前にも述べたように、遠どうみ しなの かい するが むさし あ おお きんのうぐん しき こぶ なんふう
 江、信濃、甲斐、駿河、武蔵の諸国に在って、大いに勤王軍の士気を鼓舞されていたのですが、南風きそ
 競わず、東国の官軍が次第に衰えてしまったので、ついに長慶天皇の天授6年に、信濃から河内に出られて、山田というところに庵を結んでお住まいになり、日夕和歌を詠じて無聊 (訳注：安じて休むことの無いこと) を慰められた。この集はその折の御撰で、翌弘和元年の 12 月に完成して天皇に上

第25話 吉野時代の文化

られたものです。南朝の君臣の和歌を集めたものですが、遊びに詠んだその頃の普通の和歌とはちがひ、
逆臣の武力に圧迫されて、窮乏に苦しめられた折の実感を歌ったもののみですから、悲壯で、力が
あって、今もなお詠む者をして泣かせるものが多いのです。後醍醐天皇の御製に、

ここにても雲井の桜さきにけり ただかりそめの宿と思うに

とあるのを拝誦し、また、

臥しわびぬ霜さむき夜の床は荒れ 袖にはげしき山嵐の風

とあるのを拝誦すると、その何れにも実感が溢れて、徒に題詠などを事として足るとしていた当代の遊
戯文字と、いかにその倫を異にしていたかが窺われるでしょう。殊に後者に於いては、吉野の山の皇居
がいかに粗末で、わびしいものであったかということも思いやられて、まことに畏れ多い気もします。

また、中納言為忠という人の歌に、

君住めば嶺にも尾にも家居して 深山ながらの都なりけり

とあるのを見ると、忠義の心に富んだ南朝の人々が、天皇がおわしましさえすれば、どんな山の奥でも
都であると安んじていたさまが窺われます。

この集はまた、宗良親王が自家の和歌を集めた『李花集』と共に、南朝の歴史を知るのにも大事な史
料となっています。

四種の勅撰集

尤も、和歌は当時の貴族の間に行われた唯一の文学でしたから、京都の朝廷のほうでもまた盛ん
でして、この短い時代の中に、勅撰和歌集が四種までも世に現れました。即ち後村上天皇の正平
元年に出来た花園上皇御撰の『風雅和歌集』を始めとして、同14年に後光厳院の勅りを奉じて藤原
為定の撰した『新千載和歌集』、同十八年に同院の勅りを奉じて藤原為明の撰した『新拾遺和歌集』
(但しこの集は為明が途中で死んだために、後半は頓阿法師が代わって撰した)、及び長慶天皇の天授元
年に後円融院の勅りを奉じて藤原為遠の撰した『新後拾遺和歌集』です。

この外、民間において出来た歌集には、兼好法師の『家集』や頓阿法師の『草菴集』などありま
す。

連歌の流行

けれども、その頃の武士や一般民衆の間には、和歌よりはむしろ連歌のほうが一そう多く流行して
いました。連歌というのは、ある人が上の句とか下の句を詠めば、他の人が下の句か上の句を詠んで、合
わせて一首とするのです。即ち一首の歌を二人で合作するのですから、勿論、歌道の本来から言えば、
まじめなものである筈がなかった。それで、後鳥羽上皇の御代に、藤原定家の出たところからぼつぼつ
流行し始めたのですが、初めはまったく歌人の余技で、片手間の余興に過ぎなかったのです。従って

第 25 話 吉野時代の文化

連歌の師匠は公卿や何かではなく、民間の僧侶などが主でした。これが弘く民間に連歌の流行した所以です。

とはいえ、この時代になると、定家の子孫に当たる歌道の師範家の者たちまでが、連歌に大いに興味を寄せて、和歌よりもむしろ連歌をこそ得意としたりしたので、連歌の流行はますます盛んとなり、ついに宮中にまで入って、さかんに持てはやされた。後村上天皇の正平 11 年には、京都で、『菟玖波集』という連歌の撰集まで出来たが、北朝の光厳院は、院宣でこれを勅撰に準ぜられた。

正統の和歌が次第に圧倒されて、初めは余興に遊んだ連歌がますます勢力を得て来たのです。公家対武家の反映がここにも一つ現れたと見ることも出来るでしょう。ついに長慶天皇の文中元年（北朝の後円融院の応安 5 年）には『連歌新式』が出来て、その後の連歌作者の指針となった。が、しかし、真に連歌の大成したのは次の室町時代に入って、宗祇法師が出てからのことです。

神皇正統記

次に散文の物では、当然、第一に『神皇正統記』が挙げられる。この書に就いては、すでに「北畠親房の東国経営」の話で一応の事は述べておいたが、甞にこの時代の名著であるばかりでなく、わが国の国体観念を明らかにしたものとして、千古に昭々と輝くでしょう。

劈頭第一で、「大日本は神国なり、天祖始めて基をひらき、日神長く統を伝えたまう。我国のみこの事あり、異朝にはその類なし、この故に神国というなり」と喝破して、我が国の万国に卓絶している所以を説き、皇位の極めて尊厳な所以を強い謹厳な筆で叙して、さて、「天地も昔に変わらず、況や三種の神器、世に現在し給えり、窮あるべからざるは、我が国を伝える寶祚なり、仰ぎて尊み奉るべきは日嗣を受け給う皇になんおわします」と、三種の神器を尊ぶべく、その在るところが即ち真の皇位のあるところである所以を明らかにして、南朝の正統な所以を堂々と論破したのです。しかも、これがやがてまた我々日本国民の常に抱持している神国日本という大信念に、一層不動な基礎を与えたものであることも忘れてはなりません。

次には、『太平記』が軍記物として著名です。後醍醐天皇の北條氏に対する御企てに筆を起し、北朝の足利義詮が死んで義満が後を継ぐまでの 45 年間にわたった物語ですが、吉野時代の悲劇はこの一巻に悉く収められているといってもよいです。『平家物語』に比べられる名文で、官軍の諸忠臣の苦心を眼に見るように描き出している。「歌書よりも軍書に悲し吉野山」と後世の俳人が詠んだのはこの書のことを言ったのです。

が、しかし、これらの諸書は、いづれも南朝側の人々の手に成ったものですが、これに対して北朝側の人々は『難太平記』や『梅松論』を書いています。前者はその名の示すように、『太平記』の誤謬を正そうと試みたもので、後者は足利尊氏に関する戦記を主として、彼の将来の繁栄を祈ったものです。いづれも足利氏の臣下の者の手になった物であることは、言うまでもありません。

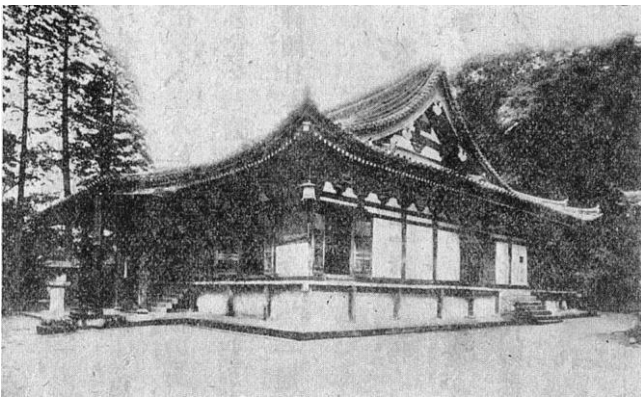
増鏡

第25話 吉野時代の文化

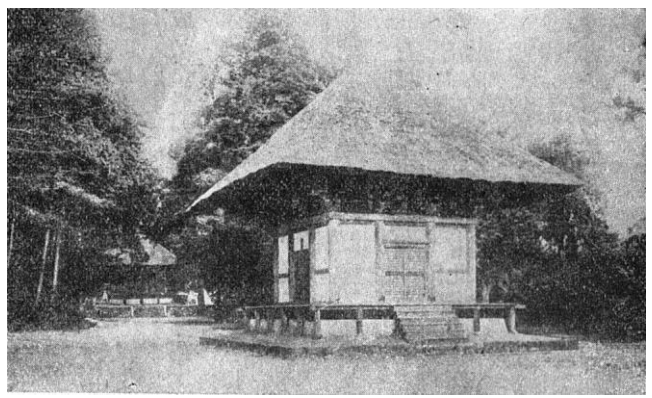
また、^{じじつ まった}事実を^{へいめんてき じょじゆつ}全くあるがまゝに^{れきしものがり}平面的に^{ますかがみ}叙述した^{おおかがみ}歴史物語^{みづかがみ}としては、「^{ていさい}増鏡」がある。^{ついそうだん}平安時代後期に出来た『^{おおかがみ}大鏡』や、鎌倉時代の初めに出来た『^{みづかがみ}水鏡』などと同じ体裁で、ある人の^{ていさい}追想談として^か書かれている。^{ごとば}後鳥羽上皇のご即位から^{そくい}後醍醐天皇の^{ごだいご}建武の^{けんむ}中興^{ちゆうこう}に至るまで、^{いた}15代150年間の事を^{しる}記したもので、^{ふくざつ じじつ か}いろいろな複雑な^{へいめい か}事実を可なり^{きやくかんてき}平明に^{じょじゆつ}且つ^き客観的に^き叙述してある事で聞こえています。

徒然草

また、^{ずいひつ}随筆には有名な『^{つれづれぐさ}徒然草』がある。^{けんこうほうし}兼好法師の^{あら}著わしたもので、^{まくらのそうし}平安時代の『^{まくらのそうし}枕草子』とよく^{くら ひひょう}比べて^{とうじ よ}批評される。^{かんそう か}主としてその^{しる}当時の^{だんべんてき}世の^{えんじゆく}さまや^{ぎ こぶんたい}人事などに^{みょう きわ}対する^{しゆみ ひろ}感想を^{しそう}書き^{じだいてき}記した^{とうじ}断片的な^{あいさくそう}ものですが、^{せそう びょうしゃ}その^{ふつう}円熟した^{こくぶん}擬古文体の^{けんきゆう}妙を^{たいせつ}極めて^{たいせつ}いることと、^{れきし けんきゆう}その^{だいじ}趣味が^{ざいりょう}広く、^{ざいりょう}その^{ざいりょう}思想がその^{ざいりょう}時代的^{ざいりょう}で、^{ざいりょう}いかにもよく^{ざいりょう}当時の^{ざいりょう}相錯綜した^{ざいりょう}世相を^{ざいりょう}描写^{ざいりょう}していることとで、^{ざいりょう}普通、^{ざいりょう}国文の^{ざいりょう}研究に^{ざいりょう}大切なものと^{ざいりょう}されているばかりでなく、^{ざいりょう}また、^{ざいりょう}歴史の^{ざいりょう}研究にも^{ざいりょう}大事な^{ざいりょう}材料と^{ざいりょう}されています。



かわち かんしんじ こんどう
大阪 河内 観心寺の金堂



かんしんじ いちじゅう とう
観心寺の一重の塔

観心寺の金堂

また、^{けんちく}建築では、^{もつと かんけい}南朝に^{ふか}最も^{かわち かんしんじ}関係の^{いっしゆとくべつ}深い^{しんようしき}河内の^{けんちくがくしゃ}観心寺に、^{けんちくがくしゃ}一種^{けんちくがくしゃ}特別な^{けんちくがくしゃ}新様式が^{けんちくがくしゃ}創められて、^{けんちくがくしゃ}建築学者^{けんちくがくしゃ}の^{けんちくがくしゃ}所謂^{けんちくがくしゃ}観心寺様と^{けんちくがくしゃ}称するものが^{けんちくがくしゃ}今もその^{けんちくがくしゃ}まま^{けんちくがくしゃ}残っている。^{けんちくがくしゃ}観心寺は^{けんちくがくしゃ}金剛山の^{けんちくがくしゃ}麓に^{けんちくがくしゃ}在って、^{けんちくがくしゃ}楠木正成の^{けんちくがくしゃ}幼い時に^{けんちくがくしゃ}学んだ^{けんちくがくしゃ}真言宗の^{けんちくがくしゃ}寺ですが、^{けんちくがくしゃ}建武の^{けんちくがくしゃ}中興の際に、^{けんちくがくしゃ}後醍醐天皇の^{けんちくがくしゃ}勅願で、^{けんちくがくしゃ}正成が^{けんちくがくしゃ}奉行を^{けんちくがくしゃ}命じられて^{けんちくがくしゃ}再建したのです。^{けんちくがくしゃ}今残っているのは^{けんちくがくしゃ}七間四方の^{けんちくがくしゃ}金堂で、^{けんちくがくしゃ}屋根の^{けんちくがくしゃ}勾配が^{けんちくがくしゃ}緩く、^{けんちくがくしゃ}曲線が^{けんちくがくしゃ}甚だ^{けんちくがくしゃ}優美で、^{けんちくがくしゃ}実によく^{けんちくがくしゃ}鎌倉時代の^{けんちくがくしゃ}諸流派が^{けんちくがくしゃ}折衷されているといわれています。

一重の塔

また、^{いしじゅう とう}観心寺には^{いしじゅう とう}一重の^{いしじゅう とう}塔というものが^{いしじゅう とう}残っている、これは、^{まさしげ}正成が^{のち}金堂を^{のち}建てた^{のち}後に^{のち}三重塔の^{のち}建築^{のち}に取り^{のち}かかったのですが、^{のち}一重^{のち}だけ^{のち}造った^{のち}時に、^{のち}尊氏の^{のち}謀反を^{のち}聞いて、^{のち}そのまま^{のち}工事を^{のち}中止して^{のち}出征し、^{のち}遂に^{のち}湊川で^{のち}戦死して^{のち}しまったので、^{のち}後に^{のち}それに^{のち}茅葺の^{のち}屋根を^{のち}付けたのだという^{のち}事です。^{のち}俗に^{のち}これを「^{のち}楠木正成^{のち}建てかけの^{のち}塔」といっています。

なお、この寺が^{ごむらかみ}後村上天皇の^{あんざいしよ}行在所であった^{ごりょう}事や^あ天皇の^あ御陵が^あここに^あ在る事は^あ前に^あ述べましたが、^あ正成の^あ首塚も^あこの^あ境内に^あ在ります。

(第25話 吉野時代の文化 終わり。 第三巻の終り。)